

「遊行柳」

大小前に
塚の作物に
れが置かす



諸国を巡る遊行僧
(ワキ)が
登場します。



ワキ：遊行僧

ワキツレ：従僧



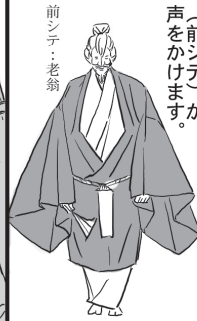
僧たちは、上総國にいましたが、
奥羽の方へ出かけることに決め、
旅をするうちに
岩代國、白河の関を過ぎます。



行く手が幾つかの道に
分かれていたので、
僧たちは広い道を
ゆくことにします。



そこへ、
老翁
(前シテ)が、
声をかけます。



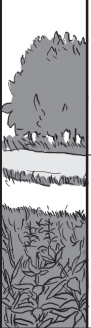
前シテ：老翁

おれも頂きますが、
昔の道を
お教えしたいと
思いました

おれを
ご所望ですか？



老翁によると、
以前はこの広い道はなく、
先代の遊行上人も、向こうに見える
森のこちら側の川岸の街道を
通ったとのことでした。
「朽木の柳」という名木もある
とのこと。老翁の案内で僧たちは
古街道を歩くことになります。



古街道は通る人も少なく、
秋霜が降りていました。
老翁の導きで一行は
朽木の柳の前へと
やってきました。



老翁の語る
ところによ
ると、昔、
西行法師は
この木の陰で
休んだ折、「道のべに
清水流るる柳陰、暫してこそ
立ちとまりつれ」と詠んだとのことだす。

老翁は、僧から
十念を授かると、
朽木の柳
の前に
立ち
寄るか
のよう
に見え
て、
そのま
ま姿を
消してしま
いました。

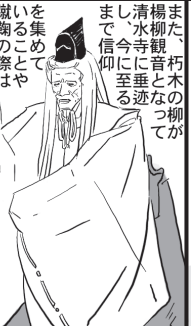
夜、僧が柳の下で読経していると、
朽木の柳の精
(後シテ)が
現れます。



後シテ：朽木の柳の精



柳の精は、僧の念仏によって
草仏でありながら
成仏できると喜び、
華秋と柳の葉の故事や、
清宮の詩での表現を引いて、
柳がいかに優れた木であるか
を語ります。



また、朽木の柳が
楊柳観音となつて
清水寺に至る途
まで信仰
を集めて
いること
を、
東か
東南に
植える
こと、
柏木が
女三宮
を見初
めたこ
となど
を語り
ます。



舞い終わると
名残惜しさに
涙をこぼします。
そして朝となり、
西へ吹く秋の風をうち払いながら、
露も木の葉も散り散りに、
朽木の柳の精は消え去りました。

